

# 会 議 録

## 1 会議名

平成 25 年度 阿賀野市安田地区地域審議会

## 2 開催日時

平成 26 年 2 月 4 日（火） 午前 10 時から午後 0 時 3 分まで

## 3 開催場所

阿賀野市安田支所「会議室」

## 4 出席者（傍聴者を除く。）の氏名（敬称略）

- ・ 委 員：斎藤委員、小嶋委員、旗野委員、羽田委員、長谷川委員、小野里委員、水野委員、清田委員、小林委員（9 人全員出席）
- ・ 田中市長
- ・ 吉野総務部長、中村民生部長、小川産業建設部長
- ・ 立川財政課長
- ・ 事務局：中野市長政策課長、苅部市長政策課長補佐、菅原企画経営係長、大澤主事  
廣田安田支所長、柁木地域市民係長、圓山主幹

## 5 議題（公開・非公開の別）

- （1）新市建設計画の進捗状況について（公開）
- （2）委員からの意見・質問事項等に対する回答について（公開）

## 6 非公開の理由

なし

## 7 傍聴者の数

なし

## 8 発言の内容

### （1）開 会（安田支所長）

おはようございます。安田支所の廣田でございます。今日は、立春でございます、特に昨日までは暖かかったんですけど、一転しまして白いものが見られています。その中で委員さん 9 名でございますけれども、旗野さんが今ちょっと遅れて来られるということでございますので、これから始めさせてもらいたいと思います。

それでは、阿賀野市安田地区地域審議会のご案内をしたところ、このようにお集まりいた

きまして大変ありがとうございました。本日出席の委員さんは、今現在9名のところ8名で  
ございます。阿賀野市地域審議会条例第7条の規定により半数以上の委員の皆さんから出  
席をいただいておりますので、これより平成25年度安田地区地域審議会を開催させていた  
だきます。なお、会議録作成の為にICレコーダーを準備しておりますのでよろしくお願いい  
たします。それでは、市長、ごあいさつをお願いいたします。

(2) 市長あいさつ

はい。皆さまおはようございます。本日は委員の皆さまには大変お忙しい中、また、天気  
の悪い中ご出席をいただきまして大変ありがとうございます。ご承知のとおり阿賀野市が合  
併して10年になります。今年は地域審議会の最終年度ということで皆さまからこれまで新  
市建設計画に基づきながら、その内容あるいは進捗状況、そういったものを審議あるいは意  
見をいただいております。今日も、そういった面で我々の方で内容につきまして精一杯  
ご説明を申し上げ、皆さまからご意見等いただきたいと思っておりますのでどうかよろしくお願  
い申し上げます。本日は本当にありがとうございます。

安田支所長

はい。ありがとうございました。阿賀野市地域審議会条例第7条に従いまして、以降の議  
事進  
行は会長である齋藤さんからよろしくお願ひしたいと思ひます。それでは、よろしくお願ひ  
します。

(3) 会長あいさつ

おはようございます。25年度地域審議会に忙しい中出席いただきありがとうございます。  
先ほど市長の方からも話がございましたが、今回が最後になるということで忘たんのないご  
意見を皆さんからいただいて、議事進行したいと思います。  
それでは、ご出席いただいております皆さまの方から自己紹介ということでお願ひしたいと思  
います。

(4) 委員自己紹介

出席委員の自己紹介

(5) 議事(新市建設計画の進捗状況について)

資料に基づき、中野市長政策課長が説明

齋藤会長： ありがとうございます。それでは、ただ今の説明につきましてご質問ご意見が  
ございましたらご発言をお願いいたします。

小嶋副会長： 水道関係の説明がなかったようですが、この点はどのようになっていますか。

小川部長： 水道事業につきましては、平成21年から30年までの阿賀野市水道ビジョンというのを作成いたしまして、この中で主要施設の耐震化、あるいは水道管路の耐震化を計画的に進めている状況です。ただ、水道事業に関しましては、合併特例債そういうものの対象にならないものですので説明の中に省略したものだと思っております。特に安田地区では、今回、昨年度と今年度で赤坂山配水池、あそこが安田地区のメインの、いわゆるできた水を貯めておく池なのですが、その耐震化が終わったところでありまして、災害に強い上水道に生まれ変わったという状況でございます。

齋藤会長： ほかにございませんでしょうか

長谷川委員： では、一点だけ。先ほど消パイの新設の関係で12か所ほど工事が行われたということですがけれども、安田地区につきましては、だいぶ昔から消パイの整備が進んでいるということで、そろっと老朽化しています。また、いろんなことで改修しなければならない箇所も相当あると思います。先ほど合併特例債の27年度までの延長の中には、そういうのは対象には含まれないのでしょうか。たとえばそういう要望があった時に、その事業で取り入れられるのは、新設のみということですか。

小川部長： 安田地区の消パイであります。だいたい年間、阿賀野市全体で10か所から11、12か所。だいたい旧町村ごと、各地区ごとで3つから4つくらい路線をやっておりまして、今年度、安田地区は、嶋瀬・草水・小松・籠田の4地区でやっております。たしかに昔からの施設はそれを今度、作り直さなければいけないという状況になっているわけですが、そちらの方も順次進めていますが、なかなか要望もかなりありますので、その辺は調整しながらやっている状況であります。基本的には、市も機械で除雪できる所はなんとか機械でお願いしたい。そうでなくて道路が狭い、あるいは、家並みがつながって除雪する場所がないという所を選別してやっているという状況でございます。これは、合併特例債の対象にならない。ただそれとは別に計画的に進めております。以上でございます。

水野委員： 1ページの防災まちづくりのことになりますけれども、昨年末、12月になりますけれども自治会長を集められて防災無線の説明会がありました。その事業は、これには関連しないのですか

吉野部長： 防災行政無線に関しましては、新市建設計画の登載事業ではございませんので、ここには合併特例債等を充当しない事業でございますので、ここには掲載しておりませ

んけれども、もうすぐ着工いたします。

水野委員： 関連で、安田地区の方の自治会長の質問によくあったのですが、今までの防災無線であるアナログタイプをやめて新しいデジタルの方式にするという説明なんですけれども、一軒一軒に受信機が入っているメリットを考えたら併用できないかという意見が多くあったと思うのですが、その辺は、どのようにお考えになりますか。

吉野部長： 確かにですね。説明会を何回か開催をさせていただきましたけれども、そういうご要望もございました。お家にあれば自分でボリュームの調整もできますので、ただこれから整備するのはデジタルということでございますので併用の方は、ちょっと難しいということですので、個別受信機に関しましては、引き揚げさせていただくこととなりますので申し訳ございませんけれどもよろしく願います。

水野委員： そうですか。案外、安田は、だしの風が吹いていると「各集落に一つくらいあっても役に立たない」という意見がかなり出てきますので。

吉野部長： 確かに昔と違いまして、今のお家は結構防音といいますか密閉度が高いものですから、それは非常に危惧しておる部分ですけれども、実は、かなり大きな音も出ます。程度問題でございますが、有事の際はかなりのボリュームで流します。あと、私どもの自治防災組織の育成なんかもお願いしておりますし、いろんなあの手この手で有事の際にお伝えしようと思っておりますけれども、聞こえないということはよほどボリュームを大きくしてテレビを聞いていらっしゃるとかでなければ有事の際には可能だというふうには聞いておりますので。よろしく願います。

水野委員： 6時とか8時とかに時報を流していただいておりますが、デジタルになると極端な話一本一本でも制御できるということなんで地区でまとまれば今まで通り時報を流していただきたいという要望は受け付けていただけるんでしょうか。

吉野部長： はい、可能でございます。特に安田地域はですね、6時、11時半、5時半、8時。個々の塔別にセットが可能でございます。

斎藤会長： 関連しますけど、今でもサイレンの音がうるさくて、「小さくして」と聞くんですよ。それだけに大きい音が出ると逆にそれどうなんだろうかな、と。ちょっとお聞きしたのですが、それとの兼ね合いがどうなってくるのかなという気がしてるんですよ。

吉野部長： 確かに安田の場合も、夜勤明けの方がこれから寝ようと思ったら大きな音がしたっ  
ていうことで、お叱りを受けているのですけれども。まあどうでしょうかね。その辺  
は、・・・

斎藤会長： というのは、消防演習の出初式にもサイレンを鳴らさないで今回やってみましたよね。  
あれもちょっとおかしいのかなって。住民が「うるさいから止める」と言うような話  
があったと伺っているのですけれども、やっぱり演習なのだから、やっぱりある程度  
そういう緊急性みたいなものを植え付けていかないとやっぱり、まずいんだろうなと。  
それと同じでやっぱり騒音の問題になってくるのですけれども、ちょっと違うんじや  
ないかな、方向性がという気がするんですよね。だからまあ少し小さくていいから、  
もう少し増やさないとたぶん聞こえない所が出てくるんだろうなと、非常に心配して  
います。特に安田地区の場合は（今は）一戸一戸にあるから、なおのことそういうと  
ころは、文句になるのかな。まあ、外で仕事をしていると聞こえないので同じことにな  
るのかな。ただ、分かんない所が増えてくる可能性が高いですね。

吉野部長： ポリューム調整も塔別にできますので、その辺は、試行錯誤を繰り返しながらとい  
うことになるかと思えますけれども。

斎藤会長： 近い人はうるさいって言うし、遠い人は聞こえないっていうし、その辺よく研究し  
てもらってお願いします。

齋藤会長： ほかにございますでしょうか。最後に未定についてのお話ですけど、今後やって  
いく予定があるのかなのか、中止になっているのかその辺は、いかがになっている  
のか。

吉野部長： 私も新市計画策定に携わった職員の一でございましてけれども、当時はですね、合  
併特例債あるいは補助金を利用するには、ちゃんと（計画が）固まっていなくても、  
もっと極端に言えばやるかやらないかも含めて未確定な事業でも載せてくださいとい  
うふうな国県の話がございましたので、必ずしもどうしてもやらなければいけない事  
業という意味の事業ではございませんので。未定になっている事業は。当然、今後の  
財政状況等や市民の皆さまのご要望を配慮しながらやっていく事業もございませ  
どもこのまま流してしまう事業でございまして、そういうふうにご理解していただ  
ければと思います。

齋藤会長： こちらの方（新市建設計画）の、説明はあるんでしょうかね。こちらの方の説明を  
お願いしてもいいでしょうかね。ちょっと不明な点があったもので。歳出（P33～34）  
の方ですけれども、繰り出し金でしょうかね。補助金等のやつだと思うのですけれど

も、だいぶ予算が切迫しているから減らせ減らせといわれている補助金等あるのですが、26年度を見るとちょっと増えているようですよね。ほかの団体には、減らせっというのに増えているような感じがするので説明ができましたら、お願いします。

立川課長： この繰り出しにつきましては、団体とかにそういうところに出す予算ではなく、あくまでも27年度に延期するときに財政計画に立てたものでして、団体に出すとかそういうものではございません。

齋藤会長： 補助金については、団体に出すお金でなんですよ。これは、1億5000万、25年度が、1億3000万くらいですか。

立川課長： そうですね。各団体、個人でもいろんな事業がありますので、今ここで、どうなっているのかという細かいところまでは、あれですけど。補助金につきましては、各団体または個人でも農業をやっている方にもいろんな方に出してる場合もありますし。

齋藤会長： 一方では、各団体とか、商工会とか各種協会とか助成金をもらっていますよね。それをいただいている方に聞いていると「絞り込んで減らすんだ、減らすんだ。」と言っているのを聞いている。これをみると増えているのがあったので、新たにそういうところが出てくる団体があるのか。なければ逆に増えているのになぜ減るのかな。

吉野部長： 外郭団体等に関する補助は、合併前の4ヵ町村時代からしてきた訳でありますけれども、やっぱり年々財政状況が厳しくなっておりますし、内容を何回も精査かけさせていただいてですね、本当に公共的団体の皆さんが100パーセントでございますので市になり代わって事業をやっている部分もでございますので本当にありがたいんですが、中にはですね、少しご自分たちのご趣味だったりあまり市民を巻き込まない活動団体という部分もございますのでその辺は、ちょっと厳しく見させていただいたところもありますけれども、一生懸命にやってくさっている団体に関しては、あまり目減りをしないような事を行っているつもりでございますけれども。よろしくをお願いします。

齋藤会長： できたら一生懸命やっているところには、いっぱいつけてやってください。よろしくをお願いします。

ほかにご質問はありませんでしょうか。

長谷川委員： 先ほどの進捗状況の説明の5ページの欄ですが、先ほど申し上げた未定の事業について、ちょっと話のあった中で、農林水産業の支援高度化の欄ですけれどもその中でほ場事業とかいろいろの欄がほとんど空欄になっている。今後の話で結構なので、少

し、議事から離れるかもしれませんが、今の農業行政ですね、あつという間に減反から生産ということで10年前には考えられなかったことが今現在起こっているわけです。確かに稲作だけに頼ってはいは、「立ち行かない」と、いうことをうすうす皆さんも感じていたわけですね。私もちょっと園芸やってますし、となりの水野委員さんもやっています。そんな関係で27年度までの事業でなかなか食い込むことはできないかと思いますが、今後は、その辺、夢が持てるのか。その辺の話を聞かせいただきたい。

田中市長： 農業は、今年、大きな転換期。40年続いた生産調整、国の方では、今後5年をめぐりに廃止する方向で決めたと。それに伴ってそこに至る経緯としてご承知のとおり農家の高齢化、そして担い手がない。そういった中で年々生産額もあるいは、生産量もすべてが右肩下りの状況の中で自給率も今39パーセント。というような状況をどう改善していくかということで国の方も検討を進めてきた。そういった中で農業を大規模化して生産性を高めていかなければならない。ですから農家の農地の集約がまず一つ。もう一つは、やはり今、米離れが進んでいる。米価の下落につながるそういった面をどう補うかということで米以外の非主食用米ですね、加工米あるいは飼料米を。そういったものを生産していくそういう方向で国の方ではかじ取りをしているわけですね。ただそれだけでは、我々の方では、なかなか農家経営がうまくいかないということで複合経営、園芸ですね。米一本から複合で経営を成り立たせるということを我々は、今検討を進めています。

ここの5ページに書いてあるほ場整備。今、もうすでに各地区に5か所に出向いてほ場整備する、そして借り手と貸し手がやりやすいようにマッチングするような形に、それに持っていきこうとしていくように地区説明会に入っています。今後だいたい5年、ほ場だと大体5年は掛かると思う。それをめぐりにある程度まとめて行きたい。それと、今年から農地中間管理機構が入りまして、その動きが今後出てくる。それが、やはり農地集積補助金といったものを活用しながら貸し手を多く集めるようにして、そして借り手を多く募集する。それを市町村がマッチングさせていく。そういうことで農地の大規模集積化を進め、そういった方向で、検討を進め、取り組みも一部始めています。26年度予算の中でも、ほ場の方は直接お金は動きませんが、複合営農の方は少し新しいモデル事業をしたいと思っております。

斎藤会長： ほかにございますか。

旗野委員： 1ページの固有の歴史・文化の保護・活用で「郷土資料館の整備」、「古文書館の整備」が未定となっておりますが、これは生涯学習課。それから、現在進行形中で「検討」というのがあるのですが、これはいつごろになったら。

吉野部長： 郷土資料館に関しては、合併前に4つございまして、一番大きな規模だったのは、笹神地区の郷土資料館。出湯にあります。今、「五頭の麓のくらし館」と言っておりますけれども。合併以来、旧町村の収蔵品に関しては今、そこに集約しております。ただ、ご覧になった方はお分かりだと思いますが、旧出湯小学校を使わせていただいているものでございますので、非常に老朽化をいたしております。1万点くらいということで県内でも屈指の収蔵点数があるわけですが、早晚、集約するかたちで新しい展示の場所なり、ストックをする場所を見つけたいと思っておりますけれども、まだ、決まってはおりません。学校の統廃合の問題も今、議論が進んでおりませんが、そういうことも関係がございますので、今のところ、「どこに、どうする」ということは決まっております。それから「古文書館」の件ですが、先ほど私が申しあげました、どうしてもやらなければならない事業として掲載したものではありません。少しでも「実施の見込みがある事業」に関しては、今から10年前ですが、「載せておきなさい」と、いうことで載せた部分もございまして、これも今すぐ建設をするとか、あるいは既存の施設をこれに替えるという計画は今のところございません。

旗野委員： 確かに、「今すぐ、こういうものに興味があるか」とか、「何の役に立つのか」とか、興味のある方は興味深い資料がたくさんあると思うんですけど。昨年、津南町に行った時に農作業の道具とか、そういったものが非常にいい感じで展示されていて、私が子どもの時に目にしたものを懐かしく見てきました。安田地区でも、民間の方がやっていて、49号線を赤坂方面に向かっていくと、神田先生という方が、実費で収集された、古くて青い建物を移築して、そこに、先生個人が集約されているものがかなりあります。そこは、たぶん開放していないと思うんですよね。それも、「もったいないな。」「市がなんとかできればな」と個人的には思っています。少し話が逸れますが、私は別の会合の時に、阿賀野市のことを勉強するための「わたしたちの阿賀野市」という教科書が予算がなくて、「保護者が実費で買ってそれを教材にしている」と聞いたので、「それはおかしいのではないかな。一番、子どもたちが市のことを勉強する教科書の予算が出ないのはおかしいのではないですか」と、ある議員さんにお尋ねしましたら、それは、「教育委員会から出るということは決まっています」と耳に入ってきたのですが。私は子どもたちの教育が大事だなと思っているので質問をさせていただきました。

田中市長： 今の副読本。26年度に「市のほうで配布する」ということで決めています。

斎藤会長： あと、ございませんか。

斎藤会長： バイパスの見通しについて、お話ができる情報があれば。

田中市長： ご承知のとおり、平成12年に事業着手して、寺社工区については既に供用開始をしている。今、水原工区について、鋭意取り組んでいるわけですが、遺跡が出ているんですね。遺跡の発掘調査がいつ終了するか。今のところそのめどが立っていない。既に遺跡調査が終わった箇所については、国のほうで積極的に工事を進めています。コンクリートのボックスが3か所で建設が行われています。残りの部分の9万㎡で遺跡調査が残っています。それを「一日にも早く終えたい」というのが今の現状です。それが終わらないとめどが立たない。

斎藤会長： ありがとうございます。あと、「新市建設計画の進捗状況について」はよろしいでしょうか。  
質問がないようですので、以上といたします。

#### (6) 議 事 (委員からの意見・質問等に対する回答について)

斎藤会長： 続きまして、各委員からの意見・質問等に対する回答について事務局より説明をお願いしたいと思います。

資料に基づき、苅部市長政策課課長補佐が説明。

斎藤会長： はい、ありがとうございます。それでは、ただいまの説明につきまして、ご質問・ご意見等がある方は、ご発言をお願いいたします。

清田委員： 2番「市内における放射能計測数値」について、これはもっともだと思えます。先日、この回答がでる前に、1月30日、偶然、テレビをつけたら新潟大学の工学部教授の今泉洋先生がテレビで発言されてました。「新潟県に関しての放射能の数値はまったく異常がない」と断言をしておられました。このことについて、私ももうちょっとテレビを詳しく見たかったですけど、数分のうちに終わらして、残念だったんですけど、それにつきると思います。がれきに関して震災地の切実な願いで、新潟県の中心都市である新潟市がこれに反対していると。と、言うことは非常にいかなものかな。反対している地域は新発田市も反対している。賛成しているのは、隣の加茂、三条、中越、上越の方が受け入れを賛成している。これは議会を通して、市長が勝手に受け入れをするわけにもいかないので、議会の賛成のもとで、やるんでしょうけど、新潟県の中心都市である新潟市が反対している。なぜ、反対しているかということ、「私たちの地域にきては困る」まったく人のことを考えない。自分中心の考えなんですね。孫子の代まで影響するから。それでは、受け入れてもらっては困る。お互いが痛みを分かち合ってやらなければならない。私たちの地域で人の痛みを分かち合わない市民

がないので安心してはいますが、もしそのような要望があった場合は阿賀野市としてはどのような対策を講じるのか。

田中市長： 県内では5市 新潟、新発田、三条、長岡、柏崎が震災がれきを受け入れるとしたが、そのうち新潟、新発田は住民の反対がかなりあり、結果として受け入れをやめた。三条、柏崎は受け入れたわけですが、本当に微量・少量です。この阿賀野市でも、以前同じような質問を議会で受けました。阿賀野市の場合、焼却施設が受け入れるだけのキャパシティがない。そのようなことから阿賀野市は手を挙げなかったし、それ以上踏み込んだ議論はさせていただきませんでした。ただ、根本にはお互いさまという部分があって、被災地の方々が一日も早く復旧復興を成し遂げるのが、震災がれきを取り除くのが、一番重要な訳ですので全国的に応援体制が組まれたわけですので、我々としてはそういった信念のもとそういった話があって、受け入れられる状況があれば、市民の皆さんの意見を伺いながら、取り組みを進めていきたい。

斎藤会長： ありがとうございます。

小林委員： それに関して、焼却すると焼却灰が濃縮される。これが一般の低放射能でも 2000 ベクレルそれ以上になると 20,000 ベクレル。国のほうからの指示がなければ、自分たちで処分してはいけない。という指導があり自治体も怪しいものはいじらないほうがいい。というのが正直な話でございます。焼却するのはいっこうに構わないがその後出る放射能の濃度によって、行き先が違う。ハッキリいって、六ヶ所村に受け入れられる 20,000 ベクレルのような高濃度といいますと、もってこられても困る。自分のところは自分で管理しなさい。となると、住民は「放射能、放射能」と騒ぐわけですから、正直なところ、自治体もそれは触らないようにしておこう。ということが本音だと思います。

斎藤会長： ほかにご意見はございますか。

斎藤会長： 支所について、6人体制ということですが、農業委員会はなくなるのですか。

吉野部長： 今段階では農業委員会はここ（安田支所）に置きます。

斎藤会長： 下（1階）のほうが、6人となると。

吉野部長： 今のままかなと。先ほども見てきたのですけれども、下（1階）に集約できるのかなという感じもいたしますし、2階だと、ご高齢の方も多いし。

斎藤会長： あまり少ないと、逆に、不安になるのかなと。一緒にいたほうが。

廣田支所長： 確かに、にぎわいいいいますか、活気付くには、ホール（1階）に大勢いた方がいいのかなと思いますが、（移動となれば）机だけではなくて、パソコンとかいろいろ付属するものが仕事場についてまわります。昔であれば、机がひとつあれば、ひとりの人間で収まったのですが、なかなか今はそうはいかないのが現状でして、農業委員会でもパソコンが1人1台、その他に2台。下のほうでも3台ありますので、収めて収まらないこともないと思いますが、そのあたりを一考する必要があるのかなという気がします。

斎藤会長： 入ってくる住民の方が、あまりにも少ないと何か・・・ちょっと。あと、電気とかいろいろ効率が悪くなるので、昔は（1階に）大勢いたわけだから入れないことはないのかなと思う。パソコンなんかは収まらないこともないと思う。住民の皆さんが不安にならないように、できれば。

廣田支所長： 建物そのものが、耐震化されていませんので。2階より1階のほうが逃げやすいことはありますけど。

斎藤会長： それは、市長にお願いをして。その辺はいずれ考えていかないといけないんでしょうけど。そのころになったら逆に（安田支所は）なくなるんでしょうかね。

田中市長： この建物自体の老朽化が激しい。耐震ができない。という状況です。ですから、耐震対策が充分でないところに、人を置くわけにいかないので「農業委員会も含めて移転をしないとイケない。ただ、すぐ明日、明後日と移転というのは難しいので検討を進めている状況。もうひとつは、集約しないと高熱水費が異常に高くなるので、コスト的に維持管理をそういった面を含めて、

斎藤会長： 逆に、そっちの方がかかるのかな。

田中市長： そうですね。

斎藤会長： はい。ありがとうございます。続きまして、常備分団のことですけれども、私も30年務めさせていただきましたが、分団のなかで、「終わるんだ」という話が聞かれますけれども、その辺はどのような方向でもっていかようとしていますか。

吉野部長： 消防本部ともずっと話をしていますが、常備分団の人が頑張ってくださいれば、残していきたい、と思っています。その方向です。ただ、分遣所は産業団地のかがやき分

署に移動しますので、そこにポンプ車の入る余裕がないので、当面こちら（現分遣所）に置きたいのですが、ここ（支所）と同じで、かなり老朽化しています。常備分団はとりあえず、残します。

斎藤会長： 今、安田分遣所は3台ですかね。何台、向こう（かがやき分署）にもっていきますか。

吉野部長： 全部です。

斎藤会長： 常備分団はあっち（かがやき分署）まで取りに行かないといけなということですか。

田中市長： 常備分団を除いて、すべて向こうへ。ですから常備分団の1台がここに残る。

斎藤会長： ということは、今ある内、2台が向こうに移るということ。であれば、不思議だなと思うことは、かがやき分署は9名ですよね。小隊が。9名で3小隊になっているのですよ。ポンプ車2台、救急車2台あるわけですよ。連絡車1台、救急車1台、これは高速関係のあれだから、3人しか乗っていけないということなんですよ。連絡車1台ということは、ほとんど昼間、火災が起きた場合は（分署に）いないということですよ。おそらく。多少のずれがあって、重複することがあるでしょうけれども。そのようなかたちになるのかなという気がしてならない。今、火災が発生した場合は、今、どのようなかたちになっているか分かりますか。今（安田分遣所）は5人ですか。

財政課長： 6人です。

斎藤会長： 6人いて、火災が発生した場合は1人しか残らないはずですよ。ということは、今よりも消防車は分遣所が1台は走って、救急車が1台走るわけですよ。常備分団が2台。消防車が走っていくんですよ。この体制によると人間を増やしていかないといけないのかなという気がしているんですよ。その辺はどのように考えているのかなと。皆さんはやっていないから分からないと思うんですよ。

吉野部長： よく承知をしていないので、全委員さんに文書で回答させていただきたいと思います。

旗野委員： 市長さんが市長になられる前の事ですが、消防署に電話をしても留守電になっていて、そのあと電話くれるのかなと思っていたが、電話をもらえなかったという方がいらっしまったんですね。緊急の時に電話しても、「ただいま留守にしています」という

ことなんでしょう。自分が、腹が病めて、あとから電話くれるのかなと思っていたが、それもなかった。そういう事案もあったので（斎藤会長は）人員が少なくなると懸念される事だと思っんですけど。

斎藤会長：（昼間は）重なることもあるでしょうけど、夜間は9人しかいないはずなんです。人員的には厳しいのかなと考えるんですけど。それで常備分団がどういうふうになっていくのかなと考えています。

田中市長： 消防関係者が来ていないので、細かく言えない。後ほど皆さんの方に分かりやすい文書を配布させていただきます。

水野委員： 野田の消防団に人員がないので、「再編成を考えていただきたい」ということで、昨年、話し合いをもったんですけど、その中で常備分団の話が出まして、消防自動車はものすごく古くて、入れ替えはとってできないような金額なんですよ。「もう1回車検を取ることにした」と話しを伺ったんですけど、それも残すか、残さないかと大きな要因なのでしょう。それと、各分団にある小型消防車。私が現役（消防団）のとき、初めて小松と千唐仁に配備され20年たっているもので、あれが全部入れ替えの時期にきているというお話なんですけど、ものすごい金額が掛かるということですけども、その見通し、計画をお聞かせ願えればと思います。

財政課長： 消防団の積載車につきましては、順次ということで計画はしていますが、ある程度、補助事業と絡めながら整備していきたい、という考えでいます。

田中市長： 相当の台数があるので、それが順次更新の時期がくるものですから、27年から計画的に更新する予定にしています。それを消防署で計画書を作成しています。

斎藤会長： タンク車は30年くらいになるのではないかな。どうしてタンク車が導入されたかご存じの方はいますか。本田町長のころ、防衛庁の補助で、大日原があるということで、火災が発生したら困るし、野焼きをするのでそれを一緒に消火するのに、安田は風が強いということでポンプ車でなくて、タンク車をお願いして、前のタンク車と入れ替えたのですよ。前は野焼きの時に必ず行っていたのですよ。笹神村でもらわなくて、安田がもらっているんですよ。（安田は）風が強くてなおのことなんですよ。かがやき分署になった場合、安田で火災があった場合にすごく心配です。ちょっと、距離が離れるほんの2分か3分でしかないかもしれないけれど、常備分団があることによって同じ頃に着くと思う。今だと職員が出て、近辺だと2～3分で着きますよね。そのあと2～3分で常備分団が行きますので、そうすると初期活動もできることから、やっぱり皆さん安心していただけるんですが、（分遣所が）離れてタンク車もなくなると、

みなさんは「どういうことだ」ということになるのではないかと思います。ポンプ車も防衛省予算でうまくお願いして、また20年、30年。その辺の兼ね合いも、人員のあれも厳しいので、どうなのかな。人を雇えば人件費もどんどん上がってきますので、よく検討してもらいたいと思います。

吉野部長： いずれにしましても、全委員さんに回答をさせていただきます。

斎藤会長： ほかにございますか。

水野委員： 市長にお伺いします。部長制に変えられて、手ごたえや感じはいかがですか。

田中市長： 今までは、20数課があり縦の形で動いていたわけです。その上に副市長あるいは市長がいてコントロールしていたのですが、これはまずいということで、小隊をつくったようなものです。数課ずつ3人の部長で手分けをして、横串を刺すというかたちで情報も共有しますし、取り組みも連携したかたちで取り組むとそれが大きな目的。それが今、目的に沿ったかたちで、取り組みが進められているという手ごたえです。

水野委員： 前よりも効率よくなっている。動きやすいという手ごたえですか。

田中市長： はい。

旗野委員： 地域産業のことで、11月4日に「産業フェア」が開催されました。今年で2年目となりましたが、お天気が少し悪かったので、6,500人くらいの来場者でした。前年は12,000人。大きな産業の方も小さな産業の方も私たちが知らない方ともそこで会って、「12月におもしろいコラボレーションをしましょう」ということから、建物を提供していただき、お料理を作る方、器はうち（庵地焼）が出して、10数人で企画して、すぐに応募者がたくさんおいでになって、新潟日報の年末の記事になったと思います。私は自分のところではなくて、本当は「阿賀野市で産業フェアをやって、コラボレーションをやりました」ということを大々的に出して欲しかったのですが、自分が思うよりそこが弱かったですけど、昨日の新聞をご覧になりましたよね。「吉田東伍記念博物館」とてもいい、スッキリとした今までない記事で私は、渡辺さん（博物館副館長）に「いい記事だったね」と電話したんですけど、まず、それがひとつ。それから、最近、女性の化粧品でヤスタヨーグルトのホエイを使った化粧品が出たのをご存じですか。そういったことも含めて、何とか、女性の口コミほど強いものはないので、私たちは思っているのですが、お菓子屋さんでも化粧品でも女性の力は男の方と違った力がありまして、そういったことも含めて、商工観光課はどのようにいるんなことをお考えでしょうか。

小川部長： 昨年は孫を連れて一緒に行ってきました。いろいろな産業があって、これが一堂に会していろいろなイベントをやる。それが終わってから、また、みんなで集まって、というのもありました。それも、私、出席したのですが、そのところで、意見交換をして、確かにどこの地区でも産業・観光を何とかしようということで、取り組んでいるんですが、ちょっとでもそれが起爆剤になればいいかなと思っているところがあります。後継者の問題も特にあるので、その辺どうなんだろうかということで、いろいろ商工観光課に聞いているんですが、市として、直接的な補助的なものはほとんどない。ただ、瓦の高等職業訓練校に対しての補助金がある意味では、後継者を育てるものになるんだろう、ということは聞いておりますけれど。産業フェアのようなものを通して、よその市町村にアピールできたらいいなと思っているところです。特に安田地区は特色のある瓦、石材、ヨーグルトなど強いもののある地域なので、もっともっと（情報）発信できればと思っているところです。

旗野委員： ありがとうございます。昨日、胎内市役所へ行きましたら、感動して帰ってきました。冷蔵庫のところにハム・肉・ヨーグルトなどが入れてあり、それを買うことができる。このぐらいの種類は阿賀野市にはないかな？と思い帰ってきました。市役所でそれを販売しているんですね。窓口にお金を払って、というのが、おもしろいな。ワインとか。胎内市はそういうものがたくさんあるので、こういうことも一利だなと思ひ帰ってきました。

田中市長： あれは、市役所がやっているんですよ。ハム工場も持っていたり、ホテルまで経営しています。そういう部分もあって、向こうはやむにやまれずやっている部分もあるので。それが、好評であれば、市役所の一部の部分で同様に市内の製品などを展示して直販することもひとつの手なのでしょうけど。できれば、商工会の窓口あたりで販売してもらえればと思っています。

旗野委員： 市長政策課のところ、「ふるさと納税」というものがある、そこに納税をしていただいた方が、自分が欲しいものを選んで、お送りするという企画があるみたいなのですが、ありがたいことに「お宅の品物も（お願いします）」とお願いして、「じゃあ、これ」ということに（しました。）（しかし）いまだに「送ってください」と言われていないということは、納税する人がいないということなのではないでしょうか。そのふるさと納税も一杯していただければ、どこかの事業もできるかもしれなと思っています。

市長政策課長： 今年度からバージョンアップいたしまして、品数を充実させたという効果もありまして、昨年度は年間約370万円の寄付がありまして、今年は1,700万円を超え

ています。効果は上がっているということです。ただ、内容を見ますと人気のあるのが、偏ってしまっていて、ヨーグルト、お酒とか3種類くらいです。

旗野委員： 県産品の何かのイベントに出ると、酒とか米には負けます。食べ物が先です。

斎藤会長： 県内に出ると、酒や米、あと笹団子。

市長政策課長： あと、地ビールが強いですね。スワンレイクさんの。

斎藤会長： 安田は魚がないけど、魚があれば強いですね。安田はヨーグルトがあるので、いいほうなんです。ただ、向こう（ふるさと納税者）が選ぶ物なのでなかなかあれなんですけどね。うちなんか、出していますが、ほとんどないですね。

旗野委員： でも、納税がいっぱいあれば。

斎藤会長： 選んでもらうのも一つだし、セットにしてやるというのも、逆にそろえてもらうのも、いい場合があると思うんですよね。市役所で「これとこれをセットで送るよ」その様なパターンもあっていいのかなと、私は感じているところもあります。

市長政策課長： 雑誌でも、去年は、「女性自身」で新潟県阿賀野市の例が載っていましたし、今日か明日発売されます「日経OFF」に今回、阿賀野市のふるさと納税の記事が載ります。

旗野委員： 買って見てみます。

斎藤会長： 昨日、白鳥まつりの記事も大きく出ていました。めずらしく阿賀野市（の記事）が、いっぱい出ていたなと思っていました。我々も、阿賀野市をいっぱい売らないといけないんだけど、よそ（他市町村）は阿賀野市を知らない。阿賀町は分かっても、阿賀野市は知らない。というのがほとんどなんです。阿賀野市が先にできたんですけど、阿賀野市を知らない。何かその辺を工夫して、キャッチフレーズでもいいから皆さんで考えてもらった方がいいのかなと、まあ、そこからだと思うんです。特に観光に関しては。そうでないと、覚えてもらえないから来てもらえない、ということがありますので。

旗野委員： いろんなところから、お客さんが来られた時に阿賀野市をPRしようとする、個人的ですが、京ヶ瀬のことは知らない。道の駅の話も「できると言ってみたり」「駄目になったと言ってみたり」というレベルでしか知らない。その辺はどうなっています

か。

田中市長： 道の駅はバイパスに付随するものなので、バイパスの供用開始時期がしっかりとめどが立たないと早い段階で計画しても、また、時代的に遅れることもあり、本来の「みちの駅」の役割が充分発揮できない可能性がありますので、ですから、めどがたった段階でシッカリとした計画を作って、歩調を合わせて整備をしていく。そういう方針です。

旗野委員： 今は、バイパスの整備が。

田中市長： バイパスの整備が優先ということであります。

斎藤会長： あまり遅く（道の駅の）話を始めると、たぶんまとまらないうちに「えい、やー」となると、かえってダメなので、必ずタイミングをよく見て整備していただきたい。

田中市長： （平成）28年、29年ですね。今の段階だと。

斎藤会長： すぐできるということはないので、その辺の兼ね合いがうまくいくようにお願いします。

斎藤会長： 6次産業化の推進についてですが、農商工連携事業ということなのですが、これ（資料）を見てるとほとんど、農林課の仕事みたいなんですよ。なんで、これが商工観光課と一緒にくっつかないのか？といつも思うんです。というのは、昨年、「農林課でそういう所を見てみたい」ということで視察に来たんですよ。うちに寄ってから脇坂園芸さん（エディブルフラワー）へ行きました。みんな、農業（関係）の人が参加しているんだけど、商工（関係）の人はほとんど参加していない。というのは、知らせていないから兼ね合いができない。そうすると、なおさら6次産業化は進んでいかないのかな？という気がしている。何か、うまくマッチングできるような体制を市の方でしていかないと、いくら言っても（6次産業化は）できないんだろうな、と感じています。

田中市長： ご存じの通り、6次産業は生産・加工・販売なので、生産者がまず中心とならないと、なかなか取り組みはうまくいかない。だから、生産者が加工して、販路がないということであれば、「商」との連携もできますけれど、基本的には生産者が製造で何をつくるか、何をどこで加工するか、そこを組み立てていただかないと、なかなかうまくいかないですね。

斎藤会長： 私、商工会の県の連合会のマッチングに出たこともあるんですけども、やはり「農」だけは何を作っているのか分からないんですよ。いちごであれば、ジャムしかないんですよ。それ以上の発想は出てこないんですよ。やはり、いろんなところと話などをしていくうちに（発想が）でてくるのが、新しいものだと思うんですよ。たとえば、菓子屋さんでもいいし、瓦屋さんでもいいんですよ。そのようなところでいろんなことを話して、視点が違ふとまた違ふのが出てくるので、そうした事が6次産業化につながっていくと思うんですよ。ただ、参加してもらうことが難しいんですけどね。

田中市長： それを、長続き、継続させるには、やはり生産者なんですよ。物を作っている方が、それをずっと続ける。たとえば、ヤスタヨーグルトさんは、6次産業の典型的ですよ。牛乳が余ったような時期に、転換したと。豆腐もそうですよね。単純な品物でいいんですよ。ただ、それが非常に魅力的な製品に。「商」と連携して、奇抜なアイデアの中でもものを作ったって、決して長続きはしない。

斎藤会長： 私が今まで思っているのは、安田の農業はこれが良いと言えば、「ばーっ」といっばい皆さんがやりますけど、いろいろな制約が出てくるんでしょうけど、段々、しぼんでくるんですよ。その辺がひとつ問題があるんですよ。「農」ばかり「商」ばかりでなくて。その辺が長く継続してやれる作物も必要だし。

水野委員： あれ（6次作業化）は格好いいですけど、まったく現実的ではない部分があるんです。作っている人が加工販売までというのは、別なんですよ。加工販売は「商業」の部分なんですよ。格好いいみたいだけど、自分で作ったものを自分で加工することは、はるかにコストと労力をそこに注ぎ込まなければならないから、斎藤さんが言われたように、そちらのノウハウを持っている方と共同にすることが、本来が一番格好いいんです。現実的だと思うんです。実際、今、小千谷市の農園ビギンさん。さつまいもプリンとか作っている方と役員が一緒なんで常に一緒になるんだけど、やるんだったら、6次産業化はできるならしないほうがいい、と、やっている人が言うんです。それほど、難しい部分があるので、そういうのであれば、むしろ、経験のある方と一緒にやれる方が、発展性はかなり高いと思います。

小川部長： 地域の6次産業化というふうな、個人個人が一人でというとなかなか大変だというお話が。その地域の6次産業化ということであれば、ある程度いろいろ産業の方とお話しながら、やっていくというのはあるかもしれない。

水野委員： 私なんか、米が中心であれば、冬のもちの加工や笹団子をつくるのが、そういうのが第一に思いつくところですけど、それよりさらに発展したものをというやっばり、一緒に考える機会があれば一番いいんじゃないかなと思います。そういうのがあ

れば、今の国の施策としてそれに取り組む資金援助があるわけだから、それが生かせればかえっていいのかなと感じます。

斎藤会長： 今のあれを見てると、課が違うからなかなかできない部分があるのかな。

水野委員： 何か、農業だけとか、生産者だけで考えるみたいな部分があるんですね。

田中市長： 6次産業化をなぜ振興するかというのは、農業者の所得を上げるためなのです。生産を拡大させるためなのです。だから、ちまちまとやる話ではなくて、大規模な生産に結びつけていく。生産物の量を上げていって、そしてそれが農家の所得の向上につながる。そういう取り組みなのです。その辺で、お菓子屋さんやります、とかそういう話とはちょっと違う。

斎藤会長： 私はそれはよく分かります。でも、阿賀野市の現状をみていると、農家の人も集約できない部分もある。今、盛んにいちごが増えているけれども、それを使用できるかといえ、なかなか難しいのかなと見ているんですけど。それを集まって、次の何かを作って加工して売るかという、集まって加工するまでがすごく難しいんだろうなと気がする。

田中市長： 今、市内に加工所もあるんです。ただ、その利用がなかなかされていない。本来、6次産業をやりたいという人たちがいれば、国の方では補助制度で加工設備。そういったものも支援できるし、そのためには大きいですよね、スケールがないとなかなか。

斎藤会長： 最初からスケールが大きいとなかなかうまくいかないということもありますよね。そのへんの兼ね合いが難しいですね

旗野委員： いちごはすごく「いちご戦争」だそうですから、そこに「越後姫」すごいですよね。栃木、九州。

斎藤会長： 「越後姫」の欠点は、早く傷むということですよ。柔らかい。流通をさせようとすると、難しいところがある。やっぱり、遠くまで持っていけない。関東、関西へ多量に送れるといいんだけど。

旗野委員： 6次産業というのはよく分からないんですけど、生産から販売まで一貫というと、規模は小さいけれど、うちも6次産業かな。

小嶋委員： たとえば、農家で販売まで自分でやるんだ。といえ、それでいいし、法人化して大

きくしてやるんだといえ、新潟県の人で一番大きくやっている人は、米を海外まで売っている人もいるんだから、国はそういうところまでの報道を盛んにしてくれればいいんだけど、「農業者、皆さんやりない」といってもできるわけがない。全員ができないので、これは特徴のある人で、特徴のある形でやってくれないかというのが私の考えなんです。そのなかでも、米をやる人、酪農から入る人、ハウスから入る人とかあるいは酒の方にまわる人とか、それで、ここの地域とマッチングしてもらいたいと意味合いのもの。わたしの「質問・意見」に書いてあるのは、中小企業で地域に踏ん張れないかと。それで、中でもただの農家の人じゃないぞとか、ただの地域じゃないぞというあたりを狙えないかということに市も力を貸してくださいよ。とか、応援してくださいよ。とかの考え方なんです。その上に行く人は法人化したり、商工の専門家に入ってもらったり、もっと挑戦してもらったらいいと思う。きっかけづくりの手助けをしてもらいながら、できないのかなという発想なんです。

水野委員： お米の関係ですと、消費が落ちているということもあるのですが。

小林委員： 議事の進行が、その他に行かないで、その話題で10分、20分も話しているんですが。

斎藤会長： はい。それではこの辺でよろしいでしょうか。(2)の委員からの意見・質問事項等に対する回答については、これで終わりたいと思います。

#### (7) その他

斎藤会長： それでは、6のその他ということで、委員の皆さんのほうでございましたら。

小林委員： 赤坂小学校と山手小学校の統廃合については、お聞きしたかったのですが、先ほど総務部長から「それはしばらくない」と言われましたけど、その背景としては、いつまでとか、どういう状況になればそういう話になるのかということをお教えしてもらいたい。もうひとつは、地域再生計画が市ではありますが、「少子化問題」と「子育て支援」。「子育て」というのは、当然、子どもが生まれ、その後のことですが、産まなければならぬ。毎年2%、多くて5%くらいの内外で人口が減っている。なんとか歯止めを掛けていただきたい。何か、これについて行政として考えているか。お聞きしたい。私の意見としては、まずは、働く場所の確保。子どもを産みました。産んでから収入を得るには、なかなか大変なことでありまして、まずは、働く場所がないとか、ということが一番多いので。読売新聞で同じような内容で、「少子化問題は国民の90%くらいが心配している問題である」ので、政府で考えてもらいたいと載っていました。

その2点をお聞きしたい。

田中市長： 部長が当分はないという話・・・

小林委員： いいえ、それは、市長の聞き違いで、それは先ほど、部長が「統廃合はしばらくはない」と言ったので。

吉野部長： しばらくというのではなくて。

小林委員： そうですね。「話が出ていない」という話でしたので、その背景には何があるのか。

田中市長： 山手地区、赤坂地区、保田地区に3小学校あるのですが、統廃合は地域の皆さんの意見を聞きながら、判断していくことで、一回ゼロベースにさせていただいています。ただ、直近で、山手小学校で2人転校されました。年度の途中で。そのために、来年から一部複式学級にせざるを得ない状況が発生しました。今、山手小については、赤坂小あるいは保田小との統合、あるいは学区の見直しなども検討を進めています。あと、複式をそのまま継続するなど4パターンですね。ですから、地域の皆さんあるいは保護者の皆さんの意見、PTAの皆さんの意見を聞きながら判断をしていきたい。

もう一点、少子化対策ですが、ご承知のとおり、全国どこでもいろいろな取り組みがされていますが、妙案はありません。ただ、阿賀野市としては、「子育て環境」これを日本一にするんだという取り組み。いわゆる、「未満児保育」、「一時保育」、「延長保育」などいろんな保育形態、まず、「負担軽減」お母さんたちの負担を軽減する取り組み。それと、経済的なものがあります。今の労働環境。正規の方が低所得でおられる。なかなか、結婚に踏み切れないというものもありますし、結婚している方々が子どもを産みたいという環境ができていない、ということが現実にある。と、聞いています。合計特殊出生率が1.41といわれていますけれど、既婚者のなかで、特殊出生率が低いのか、今、20歳から49歳の女性。これが分母になって、1.41という数字がでています。既婚と未婚。どちらを、どこを押せばいいのか分析を進めさせていただいています。いずれにしても、そういった取り組みの中で、「負担軽減」それから「経済的な負担」をなくしていく取り組みと、出会いが必要なのか。出会い、結婚、妊娠、出産、子育ての5段階ありますが、どこを押せばいいのか、その分析。それを進めているところであります。

小林委員： 分析、調査はいいんですけど、一番のポイントは、「収入の確保」と「就労の場所」ですよね。そうゆう確固たる財源がないと子どもも産めないし、ましてや、育てられない状況にあるので、産業の活性化につながりますけれども、そういった方向で努力をいただきたいと思います。個人的に思っているわけなので、調査なんてものは、今

から 10 年 20 年前から国勢調査をみれば阿賀野市（の人口）は、2%、5%減少していますけれど。

田中市長： 私の「調査」というのは、あくまで合計特殊出生率 1.41 といわれています。その細部の分析がなされていないんですよ。既婚者の子育ての負担が大きい。だから第 1 子で終わらせたい。あるいは第 2 子で終わらせたい。と思っているのか、あるいは、言われるように、雇用環境、経済的なもので結婚しないという部分で、特殊出生率が落ちているのか、どちらなのかが非常に分からない。だから、子育て環境、たとえば、保育を充実させる。そして、男女協同参画を進めて、お母さん方の負担を減らしていく。男性の育児、家事負担を増やして子育てをしやすい環境をつくって、子どもたちを増やすのか、あるいは、お金の面で非常に子どもをつくれる環境にないんだ。だから、雇用の面を充実させていくんだ。というのか、既婚者の中でも、「もうアップアップでいいですよ」ということで、自分の仕事を優先して考えているのか、それを分析するには、やはり、データが必要です。それがないと出会いの場を増やすのか、「結婚」この部分を重点的に取り組むのか、それから妊娠・出産なのか、子育ての部分なのか、この部分が分からないということなのです。

小林委員： 今の調査。比率を調べるということであれば、その当事者の面接方式で、3 日もあれば済みます。我々みたいに、子育てが終わった人は別にして、たいへん困っている人たち、若い人、結婚したばかりとか、中学校へ行っている子の父兄、などは面接方式でやれば、3 日もあればできる。そのような事を、言ってほしかったなど。少子化というものは、問題がたくさんあるけれども、市としてはすぐやりますと。いろいろと問題はあるだろうけれども、人口問題は、増やして当たり前ということで、新市の計画書に書いてありますけれども、現実的ではない、具体策がないものですから、がんばっていただきたいということで、喚起を促しているわけで、なんとか、歯止めを掛けて、金は問題ではないと思いますので、何が問題かといわれると 3 日もあれば面接調査できると。

田中市長： 今、人口が年間 400 人ペースで減っているんですよ。私もどうしても、第一の課題は、人口減少・少子高齢化対策なんですよ。そのために、少子化のためには、子育て環境日本一を目指すスローガンを掲げています。高齢化対策として健康寿命日本一。いつまでも、健康で長生きをしていただく。

小林委員： スローガンはいいんですけど。

田中市長： いえいえ、目標はスローガンの中から出てくるんですよ。それを全部が共有した、認識を共有したかたちで取り組みをする。そのような事なんですね。

旗野委員： どちらの言っていることも、よく分かるんですけど、実際には20から40歳の中に、うちの娘もふたりともその年齢に入っております。どちらも結婚しました。これから子どもを産もうか、まさに、いわれているところなんです。ふたりの会話を聞いて、私は4人ずつ産まない日本はダメになる」と一生懸命言っているんですが、「無理」と言われていますが、ロシアも中国に占領されてくるのではないかと。世界的なことを言えば、ロシアの人口が少ないところに中国の若者たちが入ってくれば、そこで結婚して、人口が増えていきます。その危機感はロシアはあるんだという。ちょっと、大きな話をすればそういうことになりますね。今、もしかして、具体的なことをお願いができるのならば、結婚した方を対象に、「こういう補助金がありますよ」、「産んでいただかないとこういうことになりますよ」とかのセミナーみたいなものを市のほうで企画していただければ。あと専門的な方たちは子育て支援とかいろんなことがあるんだけど、「いつ産んでいいかわからない」言ったりするんですよ。娘たちがね。

田中市長： 要するに、妊娠適齢期みたいな？

旗野委員： いえ、結婚して、これから子どもを産もうかな。という人たちが、実際にいるわけですよ。じゃあ、一人でやめておこうとか。一人でやめておこうとなれば、年がいけば、2人に4人がのしかかってくるんですよ。高齢化社会に。

田中市長： 一人だと大変で、という話。経済的なものですか。子育ての負担？

旗野委員： いろんなことが分からない子たちに対して、「産婦人科はこういうところがあります」とか、「今、少子化なので、こうしていかないと国自体もこうなっていくんです」という割とソフトな説明をしていただくセミナーみたいなものを市で開催していただければ。

田中市長： それを今、企画しています。26年度に実施の予定です。

旗野委員： それを期待しておきます。娘に「行け」と言っておきます。非常に大変な問題なので。それから、子育てが大変だというんだけど、女子・男子と言ってしまくと、決して、差別ではなくて、区別ということによってほしいのですが、私たち女性は当たり前でできていたことが、今、若い人たちができなくなっている事実も子育てを難しくしていることのように思います。お掃除だとかそんなことは本当に早く誰でも簡単にできていた時代が今それを継続できていない。だから、子育ては知恵もエネルギーもいりますから、そういうことも難しくさせている一つではなからうかと。私はソフトなセミナーがいいかな。と、お

願いたい。

斎藤会長： これから、ぜひ、阿賀野市のために、いい方向にもっていけるように市長から願いたいと思います。

小野里委員： 私、若い人に聞いたんですけど、阿賀野市自体が小さいですけど、他の新潟市や新潟市だと、子育て支援というかたちで大きなスーパーでカードを提示すると5%引きのシステムになっているようですけど。私は、見たことがないのですけれど。「原信さん」はシルバーだと金曜日に割引ということもありますが、阿賀野市の場合はその様な制度はあるのでしょうか。

吉野部長： あります。子育て応援カードです。

小野里委員： 若い人が知らなくて。私の近くにこれから赤ちゃんを産む人が知らなくて、ほかの自治体にあるんだけど、阿賀野市にはあるんだろうかと言っていましたので。若い人はなかなか、広報も見ないし、ホームページも見たようなことは言っていましたけど、「民間と比べると、市のホームページは期日が経過しているのもあるし、もうちょっと工夫してもらいたいな」という話も聞いたことがありますので、そういうことも要望としてお願いします。

田中市長： はい、分かりました。

斎藤会長： 子育て支援のカードはあるんですよ。あと、どれくらいの数ができるか分からないけど、各店によってスタンプを倍に付けたり、割引をしたり店によって若干違うので、持って行って買い物をすると、プラスアルファも。是非入りたいといえば、市役所に行ってもらえれば。

小野里委員： 市役所でもらえばいいんですか。

斎藤会長： 申請は支所でもできるのでしょうか。

事務局： できます。

斎藤会長： できるそうです。窓口に言って話してもらえればわかると思います。あと、ございますか。ないようであれば本日の議事はこれで終わります。本日は大変ありがとうございました。

(7) 閉 会 (吉野総務部長)

最後にひとことお礼を申し上げさせていただきます。冒頭、市長が申しあげましたとおり、合併から10年という期限付きの地域審議会で行いました。皆さま方からは、慎重なるご審議をいただきまして、新しい市のまちづくりにご協力いただきまして、本当にありがとうございました。この4月から十年一昔と申しますけれども、新しい11年目のスタートを切るわけですけれども、また、皆さま方から今までにも増して、市役所にお力をお貸しいただけるようお願いを申しあげましてお礼とさせていただきます。本当にありがとうございました。

9 問い合わせ先

総務部市長政策課企画経営係

TEL : 0250-62-2510 (内線 263)

E-mail : [shichoseisaku@city.agano.niigata.jp](mailto:shichoseisaku@city.agano.niigata.jp)